

研究員 の眼

生成AIとの付き合い方 —名刺管理アプリの経験から—

保険研究部 主任研究員 磯部 広貴
(03)3512-1789 e-mail: h-isobe@nli-research.co.jp

1——名刺管理アプリの経験

10年以上前のことになる。あるビジネスセミナーに参加したところ、仕事を効率化する手段として某名刺管理アプリが紹介された。スマホにその名刺管理アプリをインストールして名刺を撮影すれば、名刺の情報がスマホ内に蓄積される。撮影後は紙の名刺を使う必要がなくなる。蓄積された名刺の情報が多くとも検索機能で必要な情報をすぐ取り出せる。電話番号をクリックすればすぐに電話をかけることができる。こういった説明であった。

元来が新しいもの好きであることに加え、当時の筆者の仕事は出張が多く、名刺やそのコピーを持ち歩かずともスマホに名刺情報が入っているならありがたいことこの上ない。早速、試してみた。

ところが当時の名刺管理アプリの技術はかなり未成熟であったのであろう。読み取りに際して誤字が多く、また、読み取り項目の間違い（氏名の欄に会社名が入るなど）もあった。しばらくは辛抱して小さなスマホ画面で修正していたのだが、さすがに馬鹿らしくなって使わなくなった。そのとき以降「名刺管理アプリは使い物にならない」と信じるようになり、長く名刺管理アプリとは距離を置いてきた。

ところが近年、勤務先の推奨に従って渋々名刺管理アプリを使ってみると、かつてあったような不都合は全くない。読み取りの間違いは皆無であり、スマホに反映されるまでの時間も短い。当初使おうと思ったときの願い通り、すべての名刺情報がスマホに入って検索して取り出せるという状態が実現した。

それはめでたいことであるが、そのように正確な読み取りを行う技術革新はいつごろであったのだろうか。もしずっと以前に技術革新が果たされていたのであれば、かなりの長期間、その恩恵に預かれなかったことになる。

2——生成 AIに関する世の期待と利用実感の格差

「生成 AI に質問しても多くは頓珍漢な答えが返ってきます。本当にこのようなものが世の中を変えるのでしょうか？」

先日、ある生成 AI に関する講演を聴きに行った際、他の受講者から実際に出た質問である。この質問者と同様、報道で見る生成 AI への期待の高さと自ら実際に使ってみての感想との格差をうまく消化できない人も多いのではないだろうか。筆者もその 1 人である。有効な指示（プロンプト）など努力はしてみたつもりだが、総じて生成 AI への評価は低い。

ちなみに先の質問に対して講師は真正面から答えることはせず、お茶を濁すだけに見受けられた。これまでいろいろと調べた上での実感として、生成 AI というバズワードに乗っかってビジネスを伸ばしたいという勢力が一定あり、彼らにとって「生成 AI はすごい！世界を変える！」といった印象作りは欠かせない。これが期待感の高い報道を生み出している一因と思われる。あえて論理整合的につなげるならば、期待を煽って生成 AI へ資金を集め、それを開発資金として投入することで生成 AI が一層進化していくということになるのか。

3——生成 AI とどう付き合うか

現時点の生成 AI であっても、それが適する業務はもちろんあると思う。しかし歴史上、特定の分野における技術革新は珍しいことではない。例えば駅の自動改札機が開発されたとき、鉄道会社の人員配置や経営計画に大きな影響を与えたであろうが、鉄道会社以外にとって大きな変化が生じたであろうか。生成 AI に関して、いずれ人類の仕事の多くを奪っていくかのような報道もみられるが、それほど遍く世の中を変えていくものと現時点で期待してよいものであろうか。

筆者自身の保険研究員という職務であれば、クリティカルな一必須の業務で生成 AI 活用によって多大な時間と労力を節約できる一ものは特にない。現在行っているのは、

- ・論点に漏れがないか確認するため生成 AI が返す答えを一応みしてみる。
- ・著作権侵害の恐れがない画像を作成¹する。

の 2 点である。生成 AI がなくても特に不都合は生じない。率直なところ、生成 AI が保険研究員としての自らの立場や雇用を奪うかもしれないといった危機感は微塵も抱いていない。

では生成 AI を使わなくてよいのか。ここで筆者が思い返すのは名刺管理アプリの経験である。一度使えないものと断じてしまったがために、長期間、便利な機能を使う機会を逸したのかもしれない。よって生成 AI については今後の技術革新を逃さないよう、薄くとも利用を欠かさないようにしていきたい。

たとえ技術革新がなかったとしても、生成 AI をビジネスにしている立場でもなし、困ることはない。「生成 AI って結局、あの頃のバズワードで終わってしまったんだな」と振り返るだけの話である。

¹ Chat-GPT で作成した画像は商用利用が認められている。活用例として拙稿「メタバース雑感—視力と電力はどうなる？」(2024.7.24)を参照いただきたい。

<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=79151?site=nli>